

広島俳句倶楽部

令和五年十二月作品集

カンボジア

すみれ

娘がカンボジアの男子留学生を連れて来た。夕食を共にしながらカンボジアの話聞き、歓待した。留学生会館にも出向き、催し物にも参加した。夫はまた別に「カンボジアに学校を建てよう」という会に参加。会員の家族旅行が組まれ、私も参加することになった。留学生の家族との付き合いも始まり、彼の妹のホームステイを受け入れることになった。彼と我が娘はその縁、疎遠になったが、夫は連絡を取り合い、彼の妹のカンボジアでの結婚式にも参加することになった。縁の深いカンボジアであり、カンボジアの発展を願っている。

待ち合はす留学生の夏帽子

通訳のまどろこしくて夏の雲

早星宿に荷を入れ寝転びて

留学の彼が通訳炎天下

現地の子裸足で遺跡案内す

日焼の子竹細工持ち売りに来る

木から木へハンモック吊り男寝る

汗だくとなつて歩くや遺跡群

異国語の解らず笑ふ夏の月

星涼し異国の僧に手を合はせ

《作品鑑賞》

知佳子

すみれさんご夫婦にとって、わが子のように思える留学生への温かい思いと、カンボジア愛に溢れる、前向きで明るい句を楽しく拝見しました。自然体で元氣が出るすみれさんの句が、いつも素敵です。

待ち合はす留学生の夏帽子

待ち合わせ場所で見つけた彼は、見違える程眩しく成長して、夏帽子がよく似合います。

通訳のまどろこしくて夏の雲

現地の人と直接会話して親交を深めたいという気持ちだが、「まどろこしくて」から伝わります。「夏の雲」が積極的な気持ちを後押しします。

現地の子裸足で遺跡案内す

裸足で働く子の小さくも逞しい足を追い、遺跡を訪ねる日。頼もしい子を見る目が優しく、臨場感のある生き生きとした好きな句です。

異国語の解らず笑ふ夏の月

夏の月夜、お酒を酌み交わしているのでしょうか。言葉は通じなくても、笑顔で心は通じ、笑い声が聞こえてくるような良い句です。

晩秋の風吹いてゐる古墳かな

橙や古墳の傍に圀分寺

暮るるまで秋の日を見て廃寺跡

花芙蓉道は山へと細くなり

観音を眺めてをれば秋蝶来

観音を巡つてをれば雪降りぬ

綿虫や山の上にも人の住み

風に乗つて鴉の遊びをり

読み進むブツダのことは公孫樹散る

冬紅景目を睜り読むリグ・ヴェーダ

佐保光俊

車椅子畳んで落葉払ひたる

花八つ手門扉の触れて蛇散りぬ

初時雨置き傘すべて貸し出され

冬天を突き立つメタセコイアかな

石路の花母校の子等は絵を揚げ

枯葛を引いて剥がせし塀の痕

霜の朝ドア開けまづは息を吐く

湯豆腐や好みの薬味取り分ける

冬日差我が影届く奥の部屋

サイモンとガーファンクルを聞く師走

村上正人

いづくより木犀香る朝の道

ベランダに水飲みに来る鶺鴒かな

つぎつぎと旅人映す秋の水

秋の日の燦々として亀もぐる

対岸の旅人照らす秋夕日

長き夜の灯をあかあかと点しをり

翁来て立冬の鐘強く撞き

小春風旅する人とすれ違ふ

歌声はまだこの耳に冬の星

冬の月あかあかとして神来る

高尾ひとみ

坊守の抱いては括り枯萩を

検眼を終へし冬空青々と

山茶花の散りつつ咲くや日の差して

冬帽子深くかむりて外出す

一つづつ冬の浮雲流れゆく

雪催ひ夕餉のお米研ぎにけり

朝の窓初雪ちらりちらちらと

笛吹のケトル鳴り出し外は雪

脇道があれば歩きぬ雪の朝

作り手の手紙と届く花野菜

亀虫の付けるタオルをはたきたる

手水鉢うち重なれる落葉かな

スロープの枯葉一枚拾ひたる

スロープの手すりを拭ける霜の朝

しばらくは冬川を見て橋渡る

夫ひとり出かけ勤労感謝の日

スーバーの中に落葉の吹き込めり

一本の冬木屋根より高くして

マンションの中庭にある聖樹かな

コーヒーを飲んでほろろる十二月

大菊を抱へ小昼の清々し

水切りの菊の圃こゆる昼下がり

参道の公孫樹黄葉の散り止まず

足利の何某見しか公孫樹散る

山道に団栗踏んで君はしやぐ

朴の木の下に佇み冬迎ふ

電飾の冬木アリスも隠れしか

海風や君のコートに包まれて

目覚めての寝間のひと息白きかな

寒晴や吾子の水球初ゴール

あざみ

亜矢

綾乃

ゆつくりと上る電車や谿紅葉

木守柿曇れる空に見上げをり

風止みし土手の芒の高く見ゆ

貴船川沿ひに歩けばしぐれけり

黄落の鞍馬の鴉鳴きにけり

登り来し山の道辺の蘗枯る

礎の苔むす先の川澄める

白帝はどうに比叡を去りにけり

妻と来てはのかな灯り猪鍋屋

旅の果京の新酒を飲み比ぶ

掃く人のありしこの道枯葉積む

フィールドに冬の鳥来る休校日

起き抜けに隣の家の嚏かな

日向ばこ少し薄めの文庫本

やうやうに解けしパズルや冬の暮

熱燗の講釈を聞く里帰り

短日や直に獵船帰り来る

霜の夜懐かしき名で電話鳴り

朝焚火行つてきますの声が過ぎ

得心の草書一枚水仙花

観劇の帰りの道の紅葉かな

御仏の御座する庭に紅葉散る

故郷の庭に公孫樹の散り敷けり

公孫樹散る庭に夕日の差しにけり

参道に落葉踏む音響きけり

初時雨肩を濡らして帰りけり

時雨かな葉を打つ音を聞いてをり

時雨るるや傘を手にして誰を待つ

初雪の音なく屋根に降りにけり

年の暮老いも若きも第九かな

井藤希

栄吉

大畑恵

裸木の影踏み行けり美術館

マフラーを結び直して雑踏へ

コンビニのおでんを買って妻の留守

砂山のまろきを覆ひ霜白し

碧天や公孫樹の冬芽整うて

冬の波絶えずしぶきて隠れ岩

荒れて来し舟より牡蛎の船帰る

行くほどに道は狭まり枇杷の花

石碑のみ立てる山城笹子鳴く

束の間の日差し出窓のシクラメン

曉子

人を見に木枯の街へ出かけたり

コートの裾寄せて乗り込むエレベーター

落葉掃きこきまてと決め立ち話

セーターを出して着てみる雨の朝

寒昴一際目立つ夜明け前

学生の落葉清掃見てゐたり

バス停に並べる生徒暮易し

着ぶくれてポストまで行く散歩道

冬の星見てカーテンを閉めにけり

はや目覚め冬の三日月しばし見る

すみれ

山茶花の道を曲がれば母の家

南天の実に残りけり昨夜の雨

一人だけ通れる道の花入手

寒林の影の伸びたる道を行く

近付いて言葉掛けたり冬木の芽

極月の瀬戸の小舟を見てゐたり

パンの香のこども食堂冬の朝

年の暮床屋に並ぶ兄妹

年の瀬のバスに無口な人あまた

枯葎や飛び立つ鳥と降るる鳥

知佳子

故郷の小道に沿うて小菊咲く

隣から母へと貰ふ小菊かな

母が家に行く度に葉を同引くなり

故郷の柿を夫の櫛ぎ帰る

母が家の裏の祠に紅葉散る

母が家の裏の林で滑子採る

子に貰ふ夫と揃ひのちやんちやんこ

羽毛布団母の施設へ持ち行けり

幼子の聖樹を飾り帰りけり

昨日来し幼子今日は風邪と聞く

ちどり

手と手打ち吾子と別るる冬日かな

兩岸に冬の紅葉やビルの街

日を受けて落葉が頻り向う岸

小春日や川面に橋の色映り

ぬめぬめと川面光るや櫟冬芽

話し好きの若者勤労感謝の日

蓼科山に雪や啄木鳥木を叩く

落葉松の落葉の降つて香りけり

オーロラを睫毛凍らせ待つてをり

雪に寝てオーロラ消ゆる迄の夜

辻純江

紅葉踏み入院前の子と散歩

ゆつくりと大樹の紅葉見て歩く

秋の旅バス停の名の面白き

バスの中窓の紅葉に目覚めけり

干柿ができましたよと隣から

まづ先に見舞を済ませ花八手

足元の柿の落葉に立ち止まる

乾きし地ばらばら鳴つて時雨くる

吹き溜まる校門隅の落葉かな

十二月暦を捲る手の皺よ

雲雀

トンネルの遠き半円冬霞

枯野振る掘削機止み人の声

テントのジッパー硬し山眠る

ランタンが揺れて冬野の伸び縮み

山小屋の暖炉絵本のスーパかな

こつそりと布団をかぶり丸く寝く

冬帽子前髪出した方が良く

マフラーのぐるぐる巻きに目を乗せて

屋外の蛇口に細き冬の氷

鼻の声で目覚める女たち

ふじ女

花林檎薄暮の信濃路を歩く

水引草気づかぬほどの風にさへ

老女より貰ひし杜鵑草根付く

生受けし子の記念樹は姫椿

冬の蝶爪先に来て止まりけり

山茶花の花びら踏んで歩きけり

石段を転がりながら枯葉くる

駐車せし車に落葉積りたる

落葉掻だれかの声に振り返る

おでん煮る今日は家族の集まる日

松田裕子

背戸に夜の山鳩鳴いて冬に入る

蟹歩き支ふる石段七五三

枯木道背を追いかけて追いかけて

黄痘に吐くや霜夜の病棟に

冬の月検査の後にまた検査

転移なきステージⅢや小春風

コンビニの昼餉のベンチ小春空

仏間へと障子明かりの届く昼

年末の一時帰宅や庭を見る

年越の拝殿に聞く祝詞かな

森口良樹

山路来て夕日に光る薄山

蒨目の上に上にと公孫樹散る

枯尾花向うに瀬戸の海見えて

冬風の沖のさざ波日を受けて

消えずの火ちよろちよろ揺れて山眠る

夜業終へ星を探せる帰り道

叢雲の過る早さや冬の月

冬帽子振つて見送る電車かな

見覚えのある毛糸玉母の部屋

山野ウタ

冬の薔薇夜明けの雨に赤きかな

街路樹の終りの見えぬ落葉極

大空に黒き枝伸べ冬木立

連なつて小春の道を園児行く

煮凝を熱き御飯に朝餉かな

デパートの混み合ふ地下や年の暮

仏閣の広き軒光煤払

大原良子

夫の物少し片づけ冬支度

目の前を風切ることく公孫樹散る

落葉掃く僧侶や会釈して通る

山茶花や朝事参りの祖母の背ナ

名を呼ばれ入る診察冬ぬくし

席譲り又譲られて街師走

冬の川鳩一列に並びをり

高梨英子

景牡丹に届いてをりぬ夜半の雨

着ぶくれて葱買ひ来れば日の暮るる

白障子ことに明るく雪の朝

初雪を知らせて母に電話する

山茶花に雪の残れり日の差して

室の花抱へ来る人日向より

桑門わかこ

鳥の声よく響きけり冬の朝

牡蠣汁に行列できて朝の市

初雪を宿の窓から見てをりぬ

檜景挿して赤き実飾りクリスマス

那須岳は行けども行けども枯木立

小枝まで日の当たりたる枯木かな

撫子

冬ぬくし次の列車を待つ駅舎

冬菜畑茶に芋虫の大きいなる

鴛鴦の静かに川を進みをり

山盛りの牡蠣フライして皆集ふ

冬の暮原爆ドーム仰ぎたる

上島康子

鶺鴒の一羽車の光をゆく

風の一気に坂を吹き上がる

ビル照らす電飾の木々クリスマス

ポインセチア窓辺に並ぶ角の家

小雪舞ひ掃除する手を止めけり

美耶

山口の外郎やはし初紅葉

パドックの馬のお尻よ星月夜

南瓜の種こそぎ取る夕べかな

秋高し筑後川背に御籤引き

土肥律子

枝先の金柑の実や夕日受け

山茶花の花にふんはり雪の積む

窓越しの冬の日差しにうたた寝す

金川昭子

カーテンを開ければ初雪舞ひ降りて

年の瀬や売出し広告多くなり

柿ひとつ枝に残りて年を越す

河原静子

過ぎし日のことを語りぬ冬薔薇

玄関に活けし臘梅咲き初むる

冬木立透かし隣の屋根が見ゆ

紀英子

柚子実り山の鴉の騒ぎたる

しぐれては虹の架かれる石見かな

冬波の寄する荒磯夫と見て

熊谷ゆり子

小春日の米寿の散歩友と会ふ

坂道の溝の横から冬菫

年の暮回覧板の戻り来る

高嶋彌代

小腹すき昨夜の出汁で雑炊を

老猫を布団に入れて手枕す

寒菊を手折りかけては明日とする

みこ子

枯芙蓉つばみ一つの残りけり

ドア押せば落葉が先に入りたる

念入りに包丁研いで年用意

やす保

集まる日決めて注文牡蠣セット

他部署の子向かひの席に年忘

末席のことに賑やか年忘

山崎桂子

葉集め長さ揃へて砵打つ

両の手で葛湯の器受けにけり

民

令和五年十一月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

藪柑子今年まだ来ぬ鳥のこと	佐保光俊
秋日和誰かが鐘を撞いてをり	村上正人
すじ雲のいつしかほぐれ秋高し	高尾ひとみ
鳶の輪を見上げて秋を惜しみけり	井藤希
断崖を打って季秋の波しぶき	暁子
まだ固き蕾の多し菊花展	知佳子
子と高き畝を作りて大根蒔く	ちどり
背伸びして紙垂を飾れる秋祭	雲雀
大鯉の上に大鯉秋の昼	松田裕子
寒紅の姉美しき棺かな	森口良樹

雲雀 私の選んだ十句

草の実を払うて今日の大路終ふ	佐保光俊
虫の音を朝まだ暗き頃に聞く	高尾ひとみ
少しづつ高きへ飛べり秋の蝶	亜矢
風待って風船葛の傍に居る	綾乃
そこここに鰯が顔出す川面かな	井藤希
雲割れてばつと日の差す冬の海	暁子
源流は一筋の水薄紅葉	松田裕子
つかの間の日向のありて石露の花	桑門わかこ
来た道を戻れば紅葉さらに散る	撫子
赤き実を食ひ尽したり鴨の来て	高嶋絹代